

宗教的他者への誤解と社会的対立の解消に向けて —述語的論理によるスコプツィ派信仰実践の分析を事例に—

Misunderstanding religious others and resolving social conflicts
—An analysis of the Skoptsy's religious practices through predicate logic—

大喜多 紀明

やぐら遺跡伝承文化研究会

Noriaki Ohgita

Folklore and Culture Study Group of Yagura

キーワード：宗教的他者，述語的論理，信仰実践，スコプツィ

Key words : Religious others, Predicate logic, Religious practices, Skoptsy

抄録

本稿は、18世紀ロシアのキリスト教異端・スコプツィ（去勢派）の信仰実践を述語的論理の視点から分析し、その教義の合理化と組織拡大に果たした役割を検討するとともに、現代の宗教批判の問題点を考察することを目的とする。去勢派は、去勢行為を「原罪からの解放」および「神との合一」の手段と位置づけ、睾丸や乳房を「善悪を知る木」の果実、陰茎を「蛇」とみなす独自の教説を展開した。本稿では、この教説が述語的論理によってどのように合理化され、信者の勧誘や組織の発展に寄与したかを分析する。一方、現代における過剰なカルト批判もまた、述語的論理の誤用による一般化（「異常行動＝危険」）という論理的誤謬を孕んでおり、信仰の内的動機を軽視したまま、社会的対立を助長する危険性がある。本稿では、去勢派の事例を通じて、宗教的他者への誤解がどのように生じ、排除の論理が形成されるのかを明らかにする。さらに、平和論の視点から、宗教的実践の異質性を単に「異常」として排除するのではなく、その信念体系を理解し対話を促進することが、社会の分断を防ぐ上で重要であることを指摘する。述語的論理の誤謬に基づくカルト批判の危険性を認識し、より包括的な宗教理解を進めることが、結果としてポジティブ・ピースの構築にも寄与すると考えられる。

1. はじめに

歴史上、宗教的信念に基づく極端な実践行為は人々の関心を惹きつけてきた。そのなかでも、ロシアのスコプツィ派（去勢派）が実践した身体的去勢は特異であり、衝撃的な一例として認知されている。彼らは、生殖器の切除を「原罪」からの解放と位置づけ、それを通じた神との合一を目指した。このような教義は、多くの人々にとって理解しがたく、狂信あるいは異常とみなされやすい。実際、19世紀から20世紀初頭にかけての言説において、去勢派は野蛮で危険な異端とされ、時には過剰に誇張され批判の対象となった。しかし、こうした言説は、彼らの信仰体系や論理構造を十分に理解したものとはいえない。

本稿は、去勢派の信仰実践を述語的論理の観点

から分析することを目的とする。述語的論理とは、主語（この場合例えば、信者、宗教団体など）の同一性ではなく、述語（例えば、行為、特徴、象徴）の共通性に基づいた論理構成の様式である。この思考形式は、去勢派の神学的教義の構築だけでなく、むしろ彼らを異常視する外部の言説の形成にも関与していたといえる。例えば、去勢派は、睾丸と乳房は原罪の象徴であり、それを除去することで純潔を得ると解釈した。この論理は、果実は丸い、睾丸も丸い、だから睾丸は善悪を知る木の果実と同一である、という述語的同一性に基づくものであり、純粋な神学的命題というよりも、象徴的連想の産物であるといえる。同様に、現代に散見される、異常行為＝危険なカルトという乱暴かつ強引な一般化も、行為の外形的特徴を述語的に

結びつける論理的構造を持つであろう。

近年、日本や欧米では、新宗教に対する規制強化やカルト指定の動きが活発化している。こうした動きの中で、「異常行為＝危険」との短絡的な連想が働き、特定の宗教団体に対する誤解や排除の論理が形成される傾向がある。こうした短絡的な視点のみでは物事の本質を注視することはできない。むしろデマや風評による判断の錯誤をもたらす可能性がある。無論、カルト視された団体の行為的不法性については個別に評価し、適切な対処がおこなわれるべきである。本稿は、去勢派の歴史的分析を通じて、こうした述語的論理に基づく誤解がいかに社会的対立を生むのかを解明し、宗教的他者への理解と対話の必要性を提示することを目的としている。宗教的信念に基づく実践の外形的異質性を理由に、それを単なる「異常」として排除することは、信仰の内在的論理を見失わせ、不必要な対立を助長する危険性がある。ただし筆者としては、去勢行為の異常性や社会への負の影響を無視するつもりはない。また、述語的論理が信仰実践の全てを説明するわけでもない。さらに、宗教団体あるいはカルト視される団体の経済的困窮層への訴求や指導者のカリスマ性なども看過できない要素であるといえる。

本稿の主たる目的は、去勢派の信仰実践を概観し、述語的論理の観点から教義の合理化過程を分析するところにある。そのうえで、述語的論理がいかに宗教的信念の構築に影響を与え、同時にカルト批判の誤謬を生み出すのかの応用的検討をおこなう。最終的に本稿では、現代の宗教批判が過去の去勢派批判と同様の誤った論理に陥っていないかを再考し、宗教的多様性をめぐる議論の新たな視点を提供するとともに、議論のための問題提起をおこないたい。

2. 去勢派

去勢派とは、ロシアのコンドラティ・セリヴァノフが18世紀後期に創設した、キリスト教（ロシア正教系）の異端視された教団である^[1]。去勢派という呼称にみられるように、当該教団では、去勢行為が信仰実践上の重要な行為であった。この教団は「去勢教」や「スコプツィ派」、「スコプツ派」などとも呼ばれる。本稿では便宜上、「去勢派」という呼称を使用したい。この教団の主たる特徴の一つは、宗教的信念に基づいた実際の肉体的去勢

の実施であり、厳格な純潔性を求めようとするところにある。アナトール・レルア・ボリュエによれば、当時のロシアキリスト教は放蕩主義と禁欲主義に二分していた^[2]。

去勢派の存在は日本においてあまり有名ではないが、1910年に読売新聞社副社長となった足立北鷗（足立荒人）^[3]は『野蛮ナル露国』^[4]で次のように紹介した。

◎この去勢派なる宗派は、信者自身のみが、其の肉體に惨虐な手術を行ふばかりで無く、他人を誘惑し、否な強迫してこの手術を受けしめやうとする、彼等は聖經の所謂聖人なるものゝ數を殖やして、十四萬四千人に達せしめた時は、必ず救世主が出るといふことを信じて、一日も早く救世主の出現を希望するが爲めに、一人でも多くの人にこの惨虐な手術を行はうと思つて或は賄賂を用ゐ、或は暴力を用ゐて、何も知らぬ人に去勢術を受けさせる。

この足立の言説は去勢派の過激性や残虐性を強調しているが、同意なしの去勢が実際におこなわれていたかは疑わしい^[5]。一方、この教団の終末論が勢力拡大に寄与した可能性は肯首できる。さらに足立は、当該教団が滑稽であることを強調した^[5]。こうした批判的論調は、日露戦争が1904年2月8日～1905年9月5日であったこと、「露國の野蛮残忍さは、一種の歴史的遺傳」と言及したこと、足立が新聞社の一員であったことから、政治的プロパガンダであったことが推測できる。つまり、足立の去勢派への評価は恣意的であり、価値中立的とはいえない。

さらに、大正期に日本精神医学会の『變態性慾』誌を主宰した田中香涯^[6]の1929年の書籍『耽奇猥談』にもこの教団についての説明がみとれる^[7]。

また露國における去勢宗として世に知らるゝ「スコプツエン」派の信者が概して貪慾であつて兩替商を営む者の多いことや、また、新たに信者となる者のある場合には多数の信者が集會して聖餐式を挙げ、その面前に於て、男子ならばその陰莖を切斷せられ、女子ならば陰唇、乳房を切り取られて、それを皿の上に盛り、信者一同が之を食するが如き残忍行為をなすことも周知の事實である。

この田中の言説も正確であるとはいえない。例えば、切断後の陰茎の処置である。信者一同がこれを食べるのではなく、実際は大衆の面前で火に投げ込まれた^[1]。つまり、田中は当該教団の行為を創作した可能性が高い。

本稿は当該教団史の記述を目的としていないが、かいつまんでいえば、この教団には20世紀初頭においては、少なくとも10万人の信者がいた^[1]。ところがソビエト政権下、1930年代に弾圧され大きく信者数が減少した。1970年代にはほとんど消滅したが、1990年代にラトビアに残存するとされた。当該教団史についてはTulpe & Torchinovが詳細に述べている^[8]。いずれにしろ、多い時には10万人程度の数的基盤を確保したことから、当該教団には一定の社会的影響力や高い訴求力があつたことが容易にうかがえる。当該団体の信仰実践における信者らの内的経験や語りがどうであつたかについては、本来、一次資料までさかのぼることにより論証するべきであろうが、筆者はこれを入手することができなかった。筆者としては引き続き資料の入手を試みるつもりである。

去勢派の現実の姿は、言説レベルと大きく乖離していた可能性がある。実際に、足立や田中の言説が去勢派を誇張した。こうした誇張は、現代においても、とりわけ主流派とは異なる外形的特徴を持つ少数派に向けられやすい。また、こうした誇張は容易に差別へと結びつくであろう。カルトとみなされた団体への理解においても、行為の異常性のみを強調し、内面的信念を無視あるいは軽視する傾向があるのではなかろうか。

3. 述語的論理

アリストテレスの論理学は主語の同一性によって構成されている。主語と述語の関係は、当該論理に基づけば、あくまでも主語が「主」であり述語が「従」である。それに対し、西田幾多郎はいわゆる「場所の論理」において「主」と「従」の関係を逆転させた。このことについて氣多は次のように説明した^[9]。

西田にとって述語的なものというのは意識の場であり、主語と述語は意識の場での関係の仕方を表すものである。述語が主語を映す、述語が主語を包むという関係は、その極まる所で、「主語面は述語面の中に没入する」に至る〔四

一二六一〕。このとき、述語的なものが基体となり、「主語となって述語とならないもの」は「述語となって主語とならないもの」の中に没し去る。個物と一般者はここで直ちに一となる。この場所が真の無の場所である。

つまり、西田が提示した論理は述語の同一性に依存するものである。こうした論理を本稿では「述語的論理」と呼ぶことにする。

一方、精神医学者のドマルスは述語的論理を錯論理（パラロジック）と呼び^[10]、同じく精神医学者のアリエティは古論理（パレオロジック）と紹介した^[11]。高谷は、精神科医である木村敏が、西田の述語的論理（つまり場所の論理）と統合失調症の症状の関連に注目したこと、こうした関連への言及が、場所の論理とドマルスらが提示した論理との類似性についての指摘につながったことを述べた^[12]。

古論理の実例として、ドマルスの論理を前提にアリエティは以下の論理展開を示した。つまり、「命題「Xは処女です。」において、主語Xは、処女である限り、私であっても、聖母マリアであっても、同じであるから、私は聖母マリアなのだ」^[13]ということである。この推論は明確な錯誤である。アリエティによれば、こうした論理が統合失調症者の言説にみとめられる。ドマルスはこの論理を統合失調症患者の言説にみいだしたが、アリエティはその出現が、機知、詩、絵画、音楽、宗教、科学、さらには人間の創造力に深く関わっていることを述べた^[14]。また、佐良木は、述語的論理が文芸創作においてみとめられることを述べた^[13]。筆者は、日本の伝承である「お竹如来」物語の扱いを題材に、誤認識の発生機序に当該論理が関係した事例を示した^[15]。

板橋は、迷信にこの論理がみとめられることを指摘し、迷信的思考が強固であることの理由の一つをこの述語的論理に求めた^[14]。

ドマルスが暗示しているように、迷信もこの仲間に入ると考えられる。アリエティは、「ニューヨークに住んでいる男性もメキシコ・シティーに住んでいる男性も、ともにギターをひき、自分を愛している、だから二人は同一人物だ」と話した患者を紹介しているが、着物を左前に着ることを忌む迷信は、同じ論法にしたがってい

る。すなわち、「死者は左前に着る」と「私は左前に着る」から、「私は死者である」になることを恐れるのであろう。

こうした論理展開にも錯誤性が埋伏している。

板橋は中村雄一郎の文言を引用し、述語的論理が原初的な論理であることを指摘した^[14]。この論理は思考のあり方に情緒的観点から強い影響を与える形式であると仮定できる。

4. キリスト教と去勢

キリスト教と去勢の関連を示す最初の記事は使徒行伝 8 章 26 節～40 節にある、エチオピアの宦官がピリポから洗礼を受けたものであろう^[16]。ただしこの事例では、そもそもの去勢者が洗礼を受けたものである。初期キリスト教における自己去勢の記録には、2 世紀半ばのユスティノス『護教論』での、アレクサンドリアの青年がローマ総督に去勢を願い出たというものがある^[17]。この願いは拒絶されたが、青年の動機は純潔を守る衝動に基づくものであった。それ以外に、オリゲネスが去勢者であったという説もある^[18]。こうした去勢行為の前提は性的禁欲の重視であり、その大前提にはキリスト教に通底する（していた）性的欲望に対する否定的な態度がある^[19]。

こうした禁欲的態度は、正統的キリスト教のみにみとめられるものではない。ユダヤ教のユダヤ人集団テラペウタイやエッセネ派^[20]、プラトンやストア派^[21]、キリスト教異端であるグノーシス派^[22]にも顕著にみられる^[19]。いずれにせよ、宗教的信念と禁欲主義はしばしば膠着する。こうした禁欲主義が過激化したものが宗教的信念に基づく去勢行為であるといえる。ただし実際の去勢行為はキリスト教主流ではドグマ化せず、一部の先鋭化した個人が実施したにすぎない。つまり、キリスト教には、一般的に禁欲主義が通底し、それが教徒を去勢行動へと導く誘引力となるのだが、実際の去勢行動を実施するのはあくまでも個人次元であり、かつ先鋭化した場合のみであり、当該行為が正当化される教説が編成されることにより組織的に推進されることは基本的にはない。さらに一般論としても実際に体の一部を切除するのであり、当然に苦痛をとまなうこと、かつ、行為が不可逆的であることから、禁欲主義から去勢へ移行する壁は決して低いとはいえない。現代ではこうした

肉体の一部を切除する行為はカルトの証拠とみなされ、当該信仰全体が否定される危険性があるだろう。

Waugh は、マタイによる福音書 19 章 12 節を根拠に、自身の手で去勢をした統合失調者の事例を報告した^[23]。去勢に限定しなければ、宗教的な妄想により目やその他の器官を、聖書の内容を文字通りに受け止めることにより自身で肉体を傷つける行為を実施する統合失調者の事例もある^[24]。こうした行為の多くは、罪悪感を除去することを目的としている。こうした行為を誘引するにおいて、特に問題視される聖書の箇所は下記の 2 か所である^[25]。

マタイによる福音書 5 章 27 節～30 節

『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。もしあなたがたの右の目が罪を犯させるなら、それを抜き出して捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に投げ入れられない方が、あなたにとって益である。もしあなたがたの右の手が罪を犯させるなら、それを切って捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に落ち込まない方が、あなたにとって益である。

マタイによる福音書 19 章 3 節～12 節

さてパリサイ人たちが近づいてきて、イエスを試みようとして言った、「何かの理由で、夫がその妻を出すのは、さしつかえないでしょうか」。イエスは答えて言われた、「あなたがたはまだ読んだことがないのか。『創造者は初めから人を男と女とに造られ、そして言われた、それゆえに、人は父母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりの者は一体となるべきである』。彼らはもはや、ふたりではなく一体である。だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない」。彼らはイエスに言った、「それでは、なぜモーセは、妻を出す場合には離縁状を渡せ、と定めたのですか」。イエスが言われた、「モーセはあなたがたの心が、かたくななので、妻を出すことを許したのだが、初めからそうではなかった。そこでわたしはあなたがたに言う。不品行のゆえでなくて、自分の妻を出して他の女をめとる者は、姦淫を行うのである」。弟子たちは言った、「もし妻に対す

る夫の立場がそうだとすれば、結婚しない方がましです」。するとイエスは彼らに言われた、「その言葉を受け入れることができるのはすべての人ではなく、ただそれを授けられている人々だけである。というのは、母の胎内から独身者に生れついているものがあり、また他から独身者にされたものもあり、また天国のために、みずから進んで独身者となったものもある。この言葉を受けられる者は、受け入れるがよい」。

しかし、あくまでこの統合失調者の事例も個別的なものであり、集団レベルとはいえない。こうした聖書的根拠があっても、一般の統合失調者や非統合失調者が進んで去勢を実施するとは思えない。

5. 去勢派の信仰行為と教説

去勢派は、身体的去勢行為を信念体系に取り込み、これを集団でおこなった。この教団の去勢行為は禁欲を目的としていた。

安村は当該教団の信仰行為を以下のように説明した^[1]。まず去勢には二段階ある。第一段階は陰囊の切除であり、第二段階は男性器全体の切除である。その際の切除道具は、ナイフ、ハサミ、熱した鉄製の棒などである。なお、去勢は教団に加入するための絶対条件ではなく、未去勢者が指導者になることもあったという。当然に、禁欲は厳守される。教団には「教師」、「預言者」と呼ばれる指導者が存在し、宗教的な喜びにより互いを「神」、「キリスト」、「聖母」と呼び合い、互いに祈禱を捧げあっていたという。

また、安村は去勢教説と聖書言説との関連を下記のように述べた^[1]。

その根拠はイエスの「山上の垂訓」の一節マタイ 5:27—30、パリサイ人との離婚論争であるマタイ 19:3—12 に求めた。前者はモーセの十戒の「姦淫してはならない」とのことについてイエスが「情欲を抱いて女を見る者は、既に心の中で姦淫をしたのです」と規定したうえで、右の目（手）が、つまづかせるなら、えぐりだして（切って）捨ててしまいなさい、「体の一部を失っても」からだ全体がゲヘナに投げ込まれるよりよいと言う箇所である。姦淫を避けることと結び付けて「体の一部を失う」ことを去勢としたのであろうが、直接的には「片目」、「片手」を

指しており、しかもあくまでも価値の対比の強調において語られているのであって、「去勢」と結び付けるのは逸脱である。19章の方では論争でイエスが妻を離別できるのは妻が不貞を働いた場合に限るとしたことに對し、弟子たちが「（それなら）結婚しないほうがましです」と言った。イエスは結婚しないことは誰もが受け入れることの出来るものではないとし、具体的に結婚しない方がよいような場合を示した。それは、まずそのように生まれついた独身者、次に人の手で独身者にさせられたもの、最後に天の御国のために自ら独身者となったものであった。第二のケースはおそらく去勢などによるものとされている。しかし、結婚しない生活は全ての者に適用できるものではないというのが前提となっており、フルイスティにあった結婚しない純潔の生活の追求を徹底させようとしたとしても、去勢をもって実現することに結び付けたことはこれも逸脱である。同時に、キリストも使徒たちも去勢者であったという独自の解釈をもっていた。

つまり、ここでの根拠は前節で紹介したマタイによる福音書 5章27節～30節と 19章3節～12節である。

さらに安村は、去勢派独自の神学的根拠を次のように紹介した^[1]。まず、神は人間を（まるで天使のような）「性なき者」として創造した。神は人間が増加することを祝福したが、それは結婚による増加を意味しない。ところが人間が神の戒めを破り「善悪を知る木」の果実を食べた。それにより人間には「原罪」が生じたのである。そして「原罪」は全人類に受け継がれることになる。この「原罪」の証左がアダムの睾丸でありエバの乳房である。睾丸と乳房の出現にともない、人間には性的関心も芽生えた。以上をふまえ、神が人間を救済する手法が去勢である。去勢は「火と聖霊による洗礼」であり、神による最高の秘儀である。また、男性器のすべてが切除された場合には、切除された陰茎などが被術者の眼前に掲げられ、「見よ、蛇の頭は砕かれたり。キリストは復活したまえり」^[1]と唱えられた。さらに青山は、睾丸の除去のみでは十分に「誘惑者たる凶暴な蛇」を殺すこと（つまり性衝動を抹消すること）ができないことから、さらなる行為としての全切除（つまり陰茎を含めた切除）

が実施される場合があることを述べた^[5]。

オリゲネスや統合失調者の事例のような宗教的信念あるいは妄想による去勢は一般的にみれば逸脱した過激な行為である。しかし実施者にとっては宗教的な意味と信念、あるいは宗教的妄想に立脚した行為であり、その信念あるいは妄想の根拠は、しばしば聖書言説に結びつけられることで正当化される。

一方の去勢派における実践も、それが宗教的信念（あるいは妄想）によるものであり、マタイによる福音書の当該箇所を根拠としている点については、個人レベルでの去勢と何ら変わるところがない。だが、当該教団の場合は、こうした行為が組織化されている。その根拠となる教説は聖書言説に裏付けがあるが、独自の神学であり解釈が逸脱している。本稿では、とりわけ睾丸と乳房の切除、および切除された陰茎が掲げられることの理論体系が去勢派の組織化に影響を与えたと仮定し、その意味を検討したい。

なお、こうした切除行為は、形状や象徴の類似性（述語）に基づく論理で合理化された。去勢派の信仰実践は現代からみれば過激行為であることが明白だが、信者にとっては「原罪」からの解放と「神との合一」という宗教的意義を持つ信仰の究極的な表現であった。たとえ2節で述べたようなプロバガンダ的意図がなかったとしても、外形的行為の異常性が前景化しやすい。現代でも同様の論理が「異常行動＝カルト」という誤った結論を導く一因となっている。ともすれば内面的動機は無視され、行為の異常性のみが注目される。

6. 述語的論理と妄想・宗教

述語的論理の研究史は、統合失調症の妄想に埋伏する論理性を分析したドマルスの研究を一つの発端としている（もう一つの発端は西田の論である）。

例えば、キリスト教宣教師が殉教死した場合、当該宣教師は殉教の実践を通じ、磔死したイエスとの同一化がはかられる。つまり、「殉教死」と「磔死」という述語部分が同一視されることで「宣教師」と「イエス」という主語部分までもが同一視される。無論、「宣教師」と「イエス」は異なる人物である。さらに、パウロの予型論がある。この予型論は、パウロがローマ人への手紙などの書簡で例示した、宗教的価値をふまえた歴史解釈論である^[26]。

一般的には予型論とは、旧約聖書のテキスト内に、新約聖書の出来事、特にイエスを類推できる事柄をみだし、相応する旧約内の記事を「予型」とみなす古典的解釈論である^[27]。例えば上述の旧約聖書に記載された「バアルに膝をかがめなかった七千人の残りの者」は新約聖書の時代における「現在のユダヤ人と異邦人からなる共同体」の予型として位置づけられる。双方の出来事（述語）は類似しているのだが、出来事の主語部分は異なる。こうした主語の違いがありながらも、二つの出来事は予型論という概念に基づき関連づけられる。これも述語的論理がみとめられる事例といえる。

キリスト教の信仰に関連する統合失調者の妄想にみとめられる述語的論理については、ドマルスが指摘した事例を板橋が以下のように紹介した^[14]。

述語の一致をもとにした論理が統合失調症患者の思考にみられることを精神科医E・フォン・ドマルスが指摘した。「論理的な者が同一の主語にもとづいてのみ同一性を認めるのに反して、錯論理的な者は同一の述語にもとづいて同一性を認める」のだと言う。たとえば、ある患者はイエス・キリストと砂糖箱と性（sex）が同一だと信じた。なぜなら、イエスの頭は後光で囲まれ、砂糖袋は税ひもで囲まれ、そして女は男の性的な眼で囲まれているからである。

この統合失調者の言説には「イエスの頭が後光に囲まれている」というキリスト教の信仰を前提とするようなものがある。前者の予型論はパウロの神学に基づくものであり、キリスト教信仰を前提とした立場の人物にとっては一定の説得力があるかもしれないが、後者は明らかな過誤である。「正常」な認知機能を有するとすれば、「イエス」と「砂糖」を同一視することはない。双方は述語的論理で構成されている点において共通している。

「ごっこ遊び」と呼ばれる遊びがある。例えば女兒が料理をする行為をおこない（実際の料理は作っていないが）、自分が「お母さん」だという。これは、女兒と「お母さん」の行為の同一性から、女兒と「お母さん」が紐づけされることによるのであり、女兒は真実に自分が「お母さん」であるとは思っていない。加用の言葉を拝借すれば^[28]、女兒は「虚構を虚構として、虚心にそれを楽し」んでるにすぎない。パウロの予型論と統合失調者の論

理の違いは、実際の虚構を虚構と認知しているかいないかにあるといえる。つまり宗教と妄想の分岐点の一つは認知のあり方にあるといえる。ただし同じキリスト教の枠内であっても、言語靈感説の場合は部分靈感説よりも「虚構」を虚構とみとめない傾向が増加するといえる（これはあくまでも現在の科学的知見が「事実」であることを前提としている）。例えば「土の塵」からアダムが造られたという「虚構」を虚構とみとめるかみとめないかは、宗教の枠内でも分岐する。さらに極論をいえば、部分靈感説の立場の人物は、逐語靈感説でみとめられる聖書的な「現実」を現実的な「妄想」とみなすかもしれない。つまり宗教と妄想には明確な分岐があるとはいえず、そこにはグラデーションがあるため、宗教なのか妄想なのかの判別には慎重さを要するといえる。

去勢派の去勢行為が「異常」とみなされ、誇張された言説を通じて社会から排除されたように、現代でも同様の述語的論理がカルト批判に用いられ、信仰集団への構造的暴力を生み出している。Galtung は次のように指摘した^[29]。

Cultural violence makes direct and structural violence look, even feel, right - or at least not wrong. Just as political science is about two problems - the use of power and the legitimation of the use of power violence studies are about two problems: the use of violence and the legitimation of that use.

文化的暴力は構造的暴力を招く。去勢派の事例から学ぶべきは、行為の異常性に着目するのではなくその背後にある信念体系を理解することであり、誤解に基づく対立を防ぎ、平和的対話の道を開くことである。

7. 述語的論理と睾丸・乳房・陰茎の切除

本節では、睾丸、乳房、陰茎の切除を述語的論理の観点から検証する。4節で紹介したように、去勢派では、アダムとエバが神の戒めを破り「善悪を知る木」の果実を食べることにより「原罪」が生じ、その結果、人間には睾丸と乳房や情欲が生まれたと理解している。したがって、睾丸や乳房は事実上「善悪を知る木」の果実を意味するのであり、睾丸や乳房を切除することは、果実とその背景にある「原罪」を切除することを意味する。睾丸およ

び乳房の形状は木の実と同様に丸い。ここで、「睾丸（乳房）は丸い。果実も丸い。したがって、睾丸（乳房）は果実である」、という論理が透視できる。無論、これは錯誤の論理であるが、一定の情緒的納得感がある。「丸い」という述語の同一性により、本来はまったく関係がない「睾丸（乳房）」と「果実」が同一視されるのであるから、これは述語的論理によるものである。

続いて陰茎の切除についてである。男性器のすべてが切除された場合、切除された男性器が被術者の眼前に掲げられる。その際には「見よ、蛇の頭は砕かれたり。キリストは復活したまえり」と唱えられたという。ここで注目すべきは「陰茎」と「蛇の頭」の形状面における類似性であろう。男性における完全な去勢は、睾丸のみではなく陰茎までも切除することである。また「蛇の頭」は、旧約聖書の創世記で人間を誘惑した「蛇」を容易に連想させる。つまり陰茎の切除は即ち「蛇」の切除であり、延いては情欲と「原罪」の切除でもある。これは切除される側である陰茎の形状と「蛇」の頭の形状の述語的同一性による論理である。

こうした「蛇」をエロスの象徴とする事例はしばしばみとめられる。例えば近藤は、昔話や神話において「蛇」が知恵、生命、異性を象徴することを述べ、失樂園物語のアダムとエバ、「蛇」の関係を異性愛の観点から分析した^[30]。つまり「蛇」がエバをエロスの世界に誘惑し、女性としての自覚を得させた。また、エバがアダムを誘い、アダムに男性としての自覚を得させた。性的に目覚めたエバには乳房が生じ、アダムにはノドボトケが生じたという解釈である。こうした近藤の象徴論と比較した場合、去勢派の言説では果実と陰囊や乳房、「蛇」と陰茎というように直接的な因果関係を強調している。

以上のように去勢派の実践にみられる睾丸、乳房、陰茎の切除という象徴的行為は、述語的論理によって創世記の失樂園物語に紐づけられることで合理化される。さらに、こうした宗教儀礼は、当該教団の組織化に寄与した可能性が指摘できる。

8. 神との同一化

禁欲主義者にとって、神秘体験と情欲は対立概念である^[19]。したがって、情欲を忌避することが神と一体となる手段であった。豊田は、禁欲の問題が一番顕著に出現するのが宗教の領域であること、

本来的には欲望は人間の生を促進する原動力であること、禁欲は人間の営みを制限しようとするものであり、抵抗があつて当然であることを述べた^[19]。この点は去勢も同様である。一方、去勢派にとっての去勢の痛みや苦しみは、他ならぬ神秘体験に至る手段であつた。4節で紹介したように、去勢派には、キリストや使徒たちも去勢者であつたという解釈がある。つまり去勢行為は「キリスト」と一体となる手段でもある。陰茎が切除される際に唱えられる「見よ、蛇の頭は砕かれたり。キリストは復活したまへり」の文言もこれを裏付けている。生殖器が存在しない状態という述語的同一性が、去勢者を「キリスト」に接続させるのである。それにより、去勢者は「神」、「キリスト」、「聖霊」と一体となる。さらに、崇拜対象と去勢者との境界が消失し、互いを「神」、「キリスト」、「聖母」と呼び合うことが可能となり、互いが祈祷を捧げあう関係となる。換言すれば、「キリスト」と去勢者（主語）の相違は、去勢（述語）により撤廃される。それにより、去勢（述語）の同一性に基づき、他の去勢者（主語）との区別までも撤廃されるのである。去勢という「刻印」を消し去ることができないように、去勢者と「神」との境界は再構築されない。セリヴァノフは自身を「神」と呼ばせており、去勢派の信者はそれぞれが小さな「神」でもあつた。

後に上院議員になった Lubyansky は、サンクトペテルブルクにあるセリヴァノフの住居で去勢派の儀式を目撃した。以下は、Tulpe & Torchinov^[8]が引用した Lubyansky の回想である。なお、筆者は Lubyansky の原文（1872 年出版）を入手することができなかった。

There were in that place a god-mother, an old but still healthy woman, and prophetesses. Four of the prophetesses entered the room; they were pale but strong and good-looking girls. They bowed to the Savior, received his blessing, and stood in a circle holding each other's hands. When the Savior gave his permission, they began to whirl—as a whirling wheel. Continuing their whirling they began not to sing but to howl. This time, four men who were sitting on a bench with leather gloves on their hands applauded them with great vigor. I could not understand the words because of the noise though, the old man (i.e., Selivanov) as it seemed to me, tried to amuse me by

saying a number of times that he rejected everything, giving everything to God.

ところでラカン心理学では、去勢の概念がしばしば使用される^[31]。しかしここでの去勢は実際の生殖器を切除する意味の去勢ではなく精神的な意味での去勢である。そもそも男性生殖器は「全能性」を象徴する^[32]。しかし、「父権」の介入により「全能性」を喪失することが、ここでいう精神的な去勢である。精神的な去勢者は「全能性」を喪失する代わりに社会性を獲得し、社会の一員としての自我が形成される。ここでの「父権」は世俗社会であり、実際には世俗的な法や規範の形で出現し、当該人の欲望を制約する役割を担う。一方、去勢派における去勢は実際のものであり、フロイト的な恐怖や社会秩序への服従^[33]ではない。むしろ情欲から解放される手段であり、精神的「全能性」の獲得（つまり「キリスト」との合一）を目的としている。また、ラカン心理学で言及する「父権」に相当するものは、去勢派では世俗的な法や規範ではなく「神」の権威であるといえる。つまりラカンの去勢は、精神的全能性を放棄することにより「父権」（世俗社会）と一致するプロセスであるのに対し、去勢派の去勢は、肉体の一部を放棄することで「父権」（この場合は「神」あるいは「キリスト」）と一体化し宗教的「全能性」を獲得するプロセスであるといえる。

さらに、去勢派の去勢は強固なコミュニティ^[1]を形成するイニシエーション儀礼の道具ともなっている。青山は、去勢派においては少数の「選ばれた者」たちのみが精神的な発展のすべての段階を通過することができるのであり自己去勢をすることができる権利があるという、去勢派を擁護する立場の理論家であるエルマコフの見解を紹介した^[5]。そのうえで「全身が減じるより、五体の内の躰かせる部分のみ減じるほうがましである。なぜなら、大なる色情こそは、人間が自らを挙げて精神生活に捧げることの妨げとなっており、とりわけ、作業共同体の精神家族に加入することを妨げているのだから」と、エルマコフの言説を引用した。去勢というイニシエーションを通過した信者たちには、「キリスト」との一体化と信者どうしの強固な密着が生じ、「作業共同体の精神家族」を形成する。「選ばれた者」たちによるコミュニティは「よく組織された」^[5]団体であつた。経済的に潤沢である

ばかりでなく行き届いた情報網や、術後の信者のための避難施設までもあった^[5]。こうした信者間の連帯は、去勢により情欲と「原罪」を超越し、「キリスト」と一体となった「全能性」と「選ばれた者」としての自覚に立脚しているといえる。

前述のように、述語的論理では、例えば「睾丸」＝「果実」、「陰茎」＝「蛇」のような形式的類似を根拠に同一化がおこなわれた。こうした同一化は一定の情緒的納得感をともなうのであるが、論理的な真実性とは無関係であり、場合によっては明白な錯誤を含むのであって、いわば形式にもとづく強引な情緒的合理化であるともいえる。

一方、いわゆる類比的思考の場合も、形式に依存する点においては述語的論理に類似している。そもそも類比的思考とは、異なる文化や宗教現象における形式的類似性や構造的共通性を通じ、より普遍的あるいは深層的なテーマを探索するための方法論である。例えば旧約聖書の創世記やギルガメシュ叙事詩での洪水物語、キリスト教の洗礼、ヒンドゥー教徒におけるガンジス川での沐浴などは「水」による「再生」がテーマであり、形式的にも類似している。これは、例えば手や身体を水で洗うことで汚れが除去されるといった人間の普遍的体験に依拠し、「水」の象徴的機能へと派生・転化したといえる。それに対し、述語的論理では、形式的類似性に依存するものの、例えば「睾丸」と「果実」には意味的相関性が欠落しており、普遍的体験とも無関係である。また、上述の「水」による「再生」のモチーフでは、「水」は「再生」などを意味する共通の象徴であり、かつ類比的思考に基づく解釈を成立させる道具として機能している。

さらに、象徴には、社会的に共有された意味や文脈により成立する側面があるため、例えばヒンドゥー教における「牛」が象徴する「神聖性」は、キリスト教の文脈では成立しない。一方、述語的論理における例えば「睾丸」と「果実」の同一性は、あくまでも「丸い」という形式的一致に基づくのであり、社会的意味や文脈に依存していない。したがって、述語的論理の要素と象徴としての機能は前提となる論理体系が異なっている。

9. 他宗派・宗教における宗教行為

去勢派にみとめられるような身体改造やそれに類する過激な宗教行為は、キリスト教の他宗派であるロシアの鞭身派や、他宗教においてはイスラ

ーム、仏教、シャーマニズムなどにおいてもみとめられる。

鞭身派は17世紀末のロシアでダニエラ・フィリップフにより広められた宗教セクトである^[34]。この団体の儀式では、歌い踊りながら、手や鞭で互いにたたき合うことにより集団的な恍惚状態に没入する。安村によれば、「最初の人間アダムは肉を喜ばすことで罪に陥り、妻帯の罪に堕ちた」^[34]のであり、これに「勝利するために厳しい禁欲的生活、自分の意志を放棄すること、忘我状態に入るため飛び跳ね、踊り、回転し、両手を広げてまわり、息もたえだえになること」^[34]がもとめられた。さらに、「ここから狂信的興奮状態 *радение* に移っていく。禁欲は一挙に反対の極へ移る。無差別な性的遊興に変わるが、それは「キリストの愛」と受けとめられる。この際に身ごもった女性は「聖母マリア」と呼ばれる」^[34]ことになる。こうした信徒とキリストとの合一は、鞭身行為という述語の同一性により構成されている。また、禁欲と忘我により墮罪から脱し、神と一体となった女性の妊娠は、聖霊により身ごもったマリアと述語レベルで同一化されている。

自己鞭身行為は、シーア派のムスリムにおけるアーシュラーでみられる^[35]。これはカルバラーの戦いでフサインが殺害されたことを追悼するものであり、自己鞭打ちや鎖を用いることによる流血儀式という形式で実施される。目的は殉教者の苦痛の共有と信仰の表明であり、鞭打たれ流血するという述語部分が共有される。

チベット仏教では、苦しみは自我への執着や自己中心的偏見から生じると考えられており、苦行的实践にはこうした固執を弱める機能がある。かつ他者の苦しみを自己のものとして感じる能力を強化する^[36]。こうした宗教的信念の前提には、自己の苦しみと他者の苦しみという述語的同一性があるといえる。

シャーマニズムでは、夢や病気による、身体の象徴的な解体と再生による入門儀礼がみとめられることがある。エリアーデは『シャーマニズム：古代のエクスタシー技術』^[37]の115～116ページで、こうした特徴を以下のように述べた。

夢想、疾病、ないしイニシエーション儀礼は、その中心要素はつねに同一である。それはすなわち、色々の仕方（解体、深く傷つけること、腹

部切開など）で執行される身体の解剖を伴う、候補者の死と象徴的蘇生である。

つまり、シャーマンの師匠は、候補者が象徴的な「死」と「再生」を体験することで当該候補者をシャーマンとしてみとめる。かつ、こうした儀礼により、シャーマンは、人々を「死」から「再生」へと導くことができる。こうした師匠、候補者、人々の「死」と「再生」体験は、述語的レベルで一致している。また、例えば、イニシエーションの際に候補者の顔や身体に青白い灰などを塗る行為^[37]は、死者の皮膚の色と同一化するためのものであり、「死者の皮膚は青白い」、「候補者の皮膚も青白い」、「候補者は死者である」という述語的論理により解釈できる。

10. おわりに

去勢派は、その名称のごとく去勢者の価値を重視するため、一般的には奇異な団体と映り、かつ、特殊な志向を持つ人々により構成されているように思われやすい。ましてや、10万人規模の組織が成立するなどとは、とりわけキリスト教文化に馴染みが薄い日本人においては理解が困難であるといえる。本稿では、なぜ去勢派に高い訴求力があつたのか、ということに問題意識を持ち、述語的論理を援用する観点からの考察を実施した。

当該教団の信仰実践と教説は、性衝動に対する激しい罪惡観と忌避感情が通底している。だが、それだけであれば、とりわけ初期のキリスト教においては当然にみとめられたものである^[38]。以降もキリスト教信仰と性に対する罪惡視は表裏一体であつたといえる。実際、カトリックは現在もその傾向が強いであろう。だが、実際の去勢をおこなうとなると別問題である。例えばオリゲネスのような一部の敬虔な（あるいは特殊な）信者や、あるいは統合失調者の一部が、宗教的信念または妄想に基づきつつ、あくまでも個人の行為として実施された事例は理解しやすい。一方、教団レベルではきわめてまれであるといえる。

本稿では、去勢派においては、とりわけ「善悪を知る木」の果実と睾丸あるいは乳房の関連、「蛇」と陰茎の関連、と「蛇」の関連に注目した。両者における関連は形式的類似性から導き出される述語的論理により、創世記失樂園物語の記事に照合され、当該行為様式が合理化された解釈を述べた。

合理化された形式により実施される去勢行為は、情欲と「原罪」を切除する行為でもあり、結果として去勢者を「神」や「キリスト」と同一化させる機能を持つ。さらに、去勢の際に直面する激しい苦痛は、「キリスト」の苦難と結びつくことで機能が補強されるのである。また、そもそも「キリスト」が去勢者であるとの独自の教説を根拠に、信者は去勢により「キリスト」と一体化する。さらに、去勢という行為上の一致から、信者どうしも一体化する。これも述語的論理を援用すれば理解しやすい。かくて信者どうしも互いが「神」、「キリスト」、「聖母」となり、祈祷を捧げあう特殊な関係が成立する。こうして構成される関係性は、教団の拡張を補強し、かつ拡大した組織を安定化させる要素となったであろう。本稿の結論の一つは、述語的論理が、去勢派の信仰実践と基盤拡大を説明する際の一つの理由付けとなり得るということである。

さらに、この去勢行為への解釈の対立を整理することで、述語的論理の援用における両義性がより明確になる。つまり、去勢派の教義を合理化する論理であると同時に、社会的排除をも合理化する論理でもあり、この論理は、双方の心性の説明概念として機能する。

本稿では去勢派に注目した。この事例は、一般的には奇異であり特殊である。しかし、アリエティの言及にあるように、述語的論理自体は、宗教的論理にみとめられるものである。つまり、アリストテレスの論理学で説明できない概念が、宗教にはしばしばみいだされる。こうした事例は、非宗教者や現実主義者にとっては奇異に映る可能性がある。たとえそうであれ、宗教者は当該宗教における儀礼に内面的価値を置いている。奇異だからといって、これを無下に否定することは不当である。さらに極論をいえば、宗教とカルトには明確な境界がない。以上は、本稿の議論が去勢派に限定したものではないことを示している。

本稿のもう一つの目的は、現代の過剰な宗教批判やカルト排除の危険性を前景化することへの応用である。現在も、日本では特定宗教団体の社会的評価が議論されている。一般的に、カルト批判では、行為の異常性がことさらに強調される一方、信仰の内面的動機が軽視される傾向がある^[39]。この状況は、述語の類似性から一般化する誤った論理を反映しており、去勢派への誇張された言説と

通底する。カルト視される団体がよりどころとする教説が、その全部とはいわないまでも述語的論理により構成されているにもかかわらず、同様の論理構成で当該団体を批判するとすれば、これはパラドックスに外ならない。こうした錯誤性は、個人の信仰や文化的多様性を抑圧し、社会的分断を助長する。

カルト指定の恣意性や、誤った一般化を防ぐには、述語的論理を通じた去勢派の歴史的意義を再考すると同時に、現代のカルト批判に潜む論理的錯誤を明らかにする必要がある。平和論の視点からは、こうした外形上の異常性がもたらす錯誤性を乗り越え、宗教的他者との対話と理解を深めることが、ポジティブ・ピースの構築には不可欠である。

引用文献

- [1]安村仁志. 古儀式派と諸宗教セクトとの関係(2). 中京大学教養論叢. 1993, 33(3), p. 679-704.
- [2]ボリュエアナートルレルア, 林毅陸(訳). 露西亜帝国: 早稲田叢書. 東京専門学校出版部, 1901.
- [3]読売新聞 100 年史編集委員会編. 読売新聞百年史. 資料・年表. 読売新聞社, 1976.
- [4]足立北鷗. 野蛮ナル露国. 集成堂, 1904.
- [5]青山太郎. ロシアの性愛論(8): 去勢派 2. 言語文化論究. 2001, 14, p. 1-17.
- [6]柴本枝美. 1920 年代における性教育論の目的規定について: 山本宣治の性教育論を中心に. 京都大学大学院教育学研究科紀要. 2005, 51, p. 290-301.
- [7]田中香涯. 耽奇猥談. 富士書房, 1929.
- [8]Tulpe, IA., & Torchinov, EA. The Castrati ("Skopty") Sect in Russia History, Teaching, and Religious Practice. International Journal of Transpersonal Studies. 2000, 19(1), p. 11.
- [9]氣多雅子. 場所の論理と述語的論理. 西田哲学会年報. 2020, 17, p. 1-22.
- [10]Von Domarus, E. "The specific laws of logic in schizophrenia". Language and Thought in Schizophrenia. University of California Press. 1944, p. 104-114.
- [11]Arieti, S. "Creativity: The magic synthesis". Basic Books, 1976.
- [12]高谷掌子. 私と汝が「絶対の他」であるということ: 木村敏は西田幾多郎の「私と汝」をどう読むか. 京都大学大学院教育学研究科紀要. 2020, 66, p. 69-82.
- [13]佐良木昌. 芸術の中心点パトスと言語表現. 日本認知科学会第 36 回大会発表論文集. 2019, 36, p. 452-454.
- [14]板橋作美. 迷信と笑いと狂気. 東京医科歯科大学教養部研究紀要. 2008, 38, p. 55-78.
- [15]大喜多紀明. 詐欺事件として誤認識された「お竹如来」物語. 西郊民俗. 2021, (255), p. 7-14.
- [16]Wilson, BE. 'Neither Male nor Female': The Ethiopian Eunuch in Acts 8.26-40. New Testament Studies, 2014, 60(3), p. 403-422.
- [17]Caner, DF. The practice and prohibition of self-castration in early Christianity. Vigiliae christianae, 1997, 51(4), p. 396-415.
- [18]Norris, F. "Origen". In The Early Christian World. Routledge, 2002, p. 1031-1052.
- [19]豊田剛. 禁欲主義ないし禁欲道徳について. HUMANITAS. 2013, 38, p. 1-19.
- [20]千ヶ崎祥平. 初期ユダヤ教における独身: エッセネ派/クムラン宗団およびテラペウタイを中心に. 聖書学論集. 2018, (49), p. 83-103.
- [21]加藤英一. ヘレニズム時代の正義論. 横浜商大論集. 2023, 56(2), p. 27-59.
- [22]大貫隆. 聖徳大学言語文化研究所研究講演会シリーズ: 子宮としての世界: グノーシス主義の性的自然観と禁欲主義. 聖徳大学言語文化研究所論叢. 1999, (7), p. 163-179.
- [23]Waugh, AC. Autocastration and biblical delusions in schizophrenia. The British Journal of Psychiatry, 1986, 149(5), p. 656-658.
- [24]Sousa, AD. Religion and Psychiatry. Indian Journal of Psychological Medicine, 2006, 28(1), p. 21-32.
- [25]日本聖書協会. 聖書: 口語訳. 日本聖書協会, 1991.
- [26]廣石望. 論評: 大貫隆著『イエスの時』. 新約学研究. 2007, 35, p. 63-69.
- [27]野本真也. 予型論的解釈. 聖書学方法論. 日本キリスト教団出版局, 1979.
- [28]加用文男. ごっこ遊びの矛盾に関する研究: 心理状態主義へのアプローチ. 心理科学. 1992, 14(1), p. 1-19.
- [29]Galtung, J. Cultural Violence. Journal of Peace Research, 1990, 27(3), p. 291-305.
- [30]近藤良樹. 昔話・神話にみる蛇の役柄: 知恵・生命・異性の象徴となる蛇. HABITUS. 2012, 16, p. 1-25.

- [31]岡田尊司. 父という病. ポプラ社, 2015.
- [32]桑原旅人. ジャック・ラカンにおける「部分的なもの」: ファルス, 欲望, アガルマ, 欲動. 言語情報科学. 2017, 15, p. 125-142.
- [33]松本伊瑳子. 去勢恐怖の有無: 男根表象の日欧比較. 言語文化研究叢書 6: 恐怖を読み解く: 日々の生活から国際政治まで. 2007, p. 209-224.
- [34]安村仁志. 古儀式派と諸宗教セクトとの関係 (1). 中京大学教養論叢. 1991, 31(3), p. 927-943.
- [35]佐藤規子. パキスタンにおけるイマームバーラーとイマーム・フサイン追悼行事: ラーワルピンディーおよびイスラマバードの事例 (1995 年) を中心として. イスラム世界. 1998, 50, 1-20.
- [36]Pitkin, A. Dazzling Displays and Hidden Departures: Bodhisattva Pedagogy as Performance in the Biographies of Two Twentieth Century Tibetan Buddhist Masters. Religions. 2017, 8(9), p. 173-195.
- [37]エリアーデ・ミルチア, 堀一郎 (訳), シャーマニズム: 古代のエクスタシー技術. 筑摩書房, 2004.
- [38]Shaw, TM. "The burden of the flesh: Fasting and sexuality in early Christianity". Fortress Press. 1998.
- [39]森達也, 中村一成, 山本かほり, 松宮朝. 公開講座「人はなぜこんなに残酷になれるのだろうか: 排除と排斥を考える」(1). 社会福祉研究. 2022, 24, p. 55-68.

Abstract

This paper aims to analyze the religious practices of the 18th-century Russian Christian sect, the Skoptsy (Castration Faction), from the perspective of predicate logic, examining how their doctrines were rationalized and contributed to the expansion of their organization, while also considering the issues inherent in contemporary religious criticism. The Skoptsy positioned castration as a means of "liberation from original sin" and "union with God," developing unique teachings that identified testicles and breasts as the "fruit of the Tree of Knowledge of Good and Evil" and the penis as the "serpent." This paper analyzes how these doctrines were rationalized through predicate logic and how they facilitated the recruitment of believers and the development of the sect. On the other hand, excessive criticism of cults in modern times also entails a logical fallacy—namely, the misuse of predicate logic leading to generalizations such as "abnormal behavior = danger"—which disregards the internal motivations of faith and risks exacerbating social conflicts. Through the case of the Skoptsy, this paper elucidates how misunderstandings of religious others arise and how exclusionary logic is formed. Furthermore, from the perspective of peace studies, it highlights the importance of understanding belief systems and promoting dialogue rather than merely dismissing religious practices as "abnormal," as a means of preventing social division. Recognizing the dangers of cult criticism based on fallacious applications of predicate logic and advancing a more inclusive understanding of religion may ultimately contribute to the construction of positive peace.

(受付日: 2025 年 3 月 27 日, 受理日: 2025 年 10 月 7 日)

**大喜多 紀明（おおぎた のりあき）**

現在：やぐら遺跡伝承文化研究会代表

プロフィール：

やぐら遺跡伝承文化研究会代表（2011 年～現在まで）。

1965 年神奈川県生まれ。東京工業大学大学院総合理工学研究科電子化学専攻修士課程修了。団体職員。

東海大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程後期在学中。

専門は有機化学であったが、2004 年以降の専門は文化人類学・民俗学。現在は特にキアスムス論を前提とした文学研究をおこなっている。

主な論文：

大喜多紀明. アイヌの子守歌（イヨンルイカ）についての考察：心性が継承される直接的なプロセス. 京都民俗. 2013, (30/31), p. 143-158.

大喜多紀明. 新約聖書「ガラテヤ人への手紙」における裏返し構造：Bligh のキアスムス構造を前提として. 人間生活文化研究. 2023, (33), p. 561-574.

大喜多紀明. 変態心理学者としての中村古峽による神隠し解釈に関する考察：迷信打破運動の一環として. 研究論集 歴史と文化. 2025, (15), p. 1-28.